

## 外科医がヒルサイドテラスで司会をする理由

須磨久善 Hisayoshi Suma

神戸育ちの私は大阪医科大学を卒業後、虎の門病院の外科研修医に採用されて上京した。

一九六四年のオリンピック開催後十年を経たその頃、目覚ましい変貌を遂げたメトロポリス東京は私の心を魅了し、銀座、青山、六本木、どこに行っても刺激的だった。とはいえ研修医の仕事は多忙を極め、初年度は病院に住み込んで日夜を問わず病棟勤務に忙殺されていた。東京散策など夢物語という敵しい生活の中で、二十五歳の私は勇敢あるいは無謀にも結婚した。薄給で就労時間制限なし。漸く帰宅できて

久しぶりの水入らずの夕食の食卓に付いた矢先、電話が鳴って病院に呼び戻される。医学生時代の私を知る妻は、患者のためにベストを尽くしたいという私の思いを十分に承知していたが、ここまで家庭生活が犠牲になるとは想像出来なかったにちがいない。



やっと得られた貴重な休日には、二人で都内を散策し、美術館、公園、ブティック、レストランを訪れ、いくつもの気に入った場所を見つけた。そんな多種多様な東京の魅力な場所の中で妻が最も心ひかれたのが代官山のヒルサイドテラスだった。初期のA、B棟が完成して五年余りが経った頃。その斬新な白亜の建造物は瞬時に彼女の心を捉え、胸のときめく場所となった。忘れ難い思い出がある。大阪から上京してきた妻の父と三人でヒルサイドテラスに出かけ、フレンチ・レストランのレンガ屋で夕食をした時のことだ。

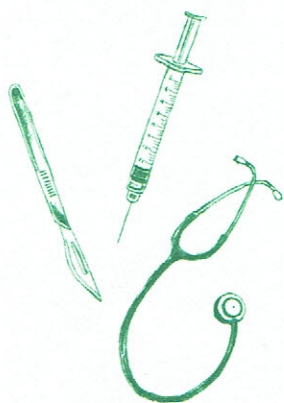
スズキのパイ包み焼に舌鼓を打ちながら、食通だった義父が唸った。「こんな洒落た店があるんやな。この料理はほんまに旨い！」結婚後初めて東京に義父を迎えた私たちにとって、それはとても幸せな時間だった。

二十年後、私はイタリアのカトリック大学から招聘されて、心臓外科教授としてローマに住んだ。ローマの街は飽きることのない文化と芸術に満ち溢れ、気に入った無名の石畳の小路は、春夏秋冬、晴れの日雨の日、朝と夕、それぞれに景色を変え、散歩が楽しめる。もちろん厄介なことにも出会った。短期間に二度も私の車が盗難に会い、街なかで妻がスリに襲われる。ローマの友人に言わせると、そんなことはイタリアでは日常の一部だそうだ。二年間の滞在中には、イタリア各地のみな

らず、欧州・アジア諸国から招かれて手術を行った。フランス、ベルギー、オランダ、モナコ、エジプト、インド、タイ、マレーシア……。五百人余りの外国人手術をすべて無事に成し遂げ、ローマから東京へ戻った。

帰国後に勤務した病院では、様々な難手術に挑戦し、新しい心臓手術も開発した。結果が命と直結する仕事を日々続けるかたわら、医療以外に私は一つの新しい試みを始めた。それは、子どもたちを病院に招いて回診、検査を共にし、その日行っている心臓手術を手術室と直結したスクリーンにリアルタイムで映し出して見学させるというものだ。これまでどこの病院でもやったことがない試みに、果たして病気でもない元気な子どもがやって来るのか、皆が首をかしげた。間もなく近隣

の小学校から初めて数人の子どもたちがやってきた。用意した子ども用のユニフォームを着て聴診器を握りしめ、興味津々に病院内を子どもたちが歩く。心臓手術を目の当たりにして目を丸くした子が身を乗り出して息を飲む。マイクを通して子どもたちから投げかけられる率直な質問に、手術中の私はわかりやすいように解説した。私が院長を務めた五年間に三千人を超える子どもたちが病院を訪れ、その日をきっかけに医師を志した少年少女が何人もい



る。現場で本物を見せる。それこそが大人から子どもたちへの大切な贈り物だろう。

帰国して数年後に代官山近くのマンションに住み、旧山手通りを愛犬のゴールデン・レトリバーを連れて散歩することが日課となった。爽やかな朝の陽射しを浴びて黄金色に輝く尻尾を振りながら、嬉しそうにちらりと私を見上げる。通り沿いに高層ビルはなく、空が広い。以前と変わらぬ落ち着いた情景を保ちながら、棟を増やしたヒルサイ



ドテラスの前をゆっくりと歩んで行く。

四年前、勤務していた病院を定年退職したのを機に私はメスを置き、三十年余りの外科医生活を離れてヒルサイドウエストに小さなプライベートオフィスを開いた。初めて代官山を訪れてから四十年を経て、ついにヒルサイドの住人の一人となったわけだ。今は外科医経験で培った医療知識を活かして、セカンドオペニオンを中心とした診療を行っているが、その一環として二年前からクラブヒルサイドで「現代健康セミナー」を開催し、司会を務めている。各医療分野の専門医に有益な知識をわかりやすく解説していただき、参加者の皆さんからの質問に丁寧に答える。参加者は頷きあい、真剣な眼差しはいつしか緩み、笑みがこぼれる。日進月歩の医療に関する諸問題について、

ゆったりと寛いだ雰囲気の中で率直に語り合う。そんな時間を皆が共有できるのも、ヒルサイドテラスが育んできた大らかさの賜物に違いないと感じている。

須磨久善（守ま・ひさよし）

一九五〇年生まれ。世界初の胃大網動脈を用いた冠動脈バイパス手術、日本初のパチスタ手術を成功させ、「神の手をもつ男」と言われる。その人生は小説や映画、テレビドラマで描かれ、業績は今春中学の理科教科書に採用された。日本心臓病学会栄誉賞受賞。著書『医者になりたい君へ』等。

#### 須磨久善の現代健康セミナー Vol.3

好評につき第3シリーズ(全6回)が10月よりスタートします。詳細は、31ページをご覧ください。